

(小玉氏の校正)

復活節午前集会

キリストの復活の秘義

2003年4月13日(東京新宿)

今も生きて働いている霊的実在者

暦の上での復活節は、来週の4月20日なんですけれども、一週間繰り上げて、本日、東京キリスト召団新宿集会では復活節をそなえていただきました。私はこの集会はとても大事な集会だと思っています。見渡してみますと、ここに集われた方々は、大げさに言えば、キリストに生命を捧げるといふ気持ちで来られたと思います。キリストに生命を捧げる方にこそ、キリストはご自分の生命を豊かに宿らせ、芽生えさせ、新しく本当のキリストの姿に我々を変えてくださる。キリストの恵みというのは、無条件絶対の恵みなんですけれども、これをいい加減な気持ちで受けとる人には、これは勿体もったいなさすぎるんです。

「豚に真珠を投げるな」

という聖書の言葉がありますけれども、私はちつともひどいとは思わない。もちろん、「豚」

には気の毒ですけれども、「全くその価値のわからない者」という意味に受けとつていただいていい。あまりにも大事なものが、その値打ちが全くわからない人の所に差し出されて、踏みじられて捨てられる。こうしたことはそれを大事にする人から見ましたら、堪えられないことです。いや本当にそうなんです。そのくらいこれは尊い宝物です。イエス・キリストのご復活を中心とした生涯、これは私たちにとつては宝物です。ところが、この宝物であるキリスト、主さまのご生涯は実のところ隠されたものなんです。

さきほど、イラク戦争のことが話題になり、自分たちの日々の関心がどうしても社会的な出来事へ向かうというお話がありました。敗戦を経た日本の当時を生きた人間としては、誠に無理からぬ止むを得ないところだと思えますけれども。私は、社会的な出来事や日常の出来事に囚とらわれることに対しては「ノー」と言います。

「キリストに囚とらわれてほしい」

と、私は申し上げたいんです。キリストを知らない方は、「平和運動」ということで一生懸命やります。けれども、我々、キリストにしがみついている人間にとつては、それを乗り越えて、キリストが全世界にしみ込んでくださらなければ、現象的に戦争が起きたり終つたりしても、それは本当の解決ではないと思つています。我々は戦争が起こらないことを願わない者はいない。願わない者はいないけれども、現に起こつてしまう。そうでしょ。

我々はいったどこに目をつけているのかということ、私は狂える如くに思う。我々は

イエス・キリストから目を離したら、とんでもない所へ行ってしまうということです。私たちは寝ても醒めてもイエス・キリストの中に生き、その方と共に生き、その方と運命共同体である。その中から祈り、叫び、振舞うという、その原点がなくなったら、それは外的まはりの外れになってしまう。キリストはちつとも喜ばれないと思えます。それだったら、この世の人と全く変わらないですから。私はそのくらいにキリストにいわば夢中になっていきますし、またなりたいし、そのために人に棄てられても厭いとわない。

キリストは当時の人々に棄てられた。彼らは善を願っている人たちだった。パリサイ人びとたちも、当時のイスラエルの人たちも、みな自分は神に選ばれた選民だと自負して、自分たちこそ神のオーソドックス(orthodox) 正統派、正統的) な、神の国の後継者と自負していた。そして、あのイエス・キリストという、けしからん、伝統を破壊し、自分たちの先祖以来の言い伝えを破壊し、

「己を神の子と称し、イスラエルの宗教を破壊する、あの者を殺せ！」

と言つて、熱心に主張した。民衆も巻き込まれて、声を一つにして、

「イエスを十字架につけろ、十字架につけろ！」

と叫んだ。叫んだのは決して宗教家たちだけではありません。民衆もみなそうしました。あの救いを受けた、恵みを受けた民衆たちがこぞつて、

「イエスを十字架につけろ、バラバをゆるせ！」

と言つてきかなかつた。イエスはただ独り十字架につかれた。弟子たちも逃げてしまった。そういう現実というものを、私たちは二千年前にイスラエルの地であんなことが起こつた——当時、新聞があつたら新聞記事に載つたりして、その後、すぐ忘れ去られてしまう——そんな歴史的出来事なのか。それとも、現に今、我々に迫ってきている霊的な現実であるのか。イエス・キリストが十字架に懸かり、我々の罪をあがないきつたという根源的な事実、今も我々に食い込んでくる根源現実、それを受けとつていなかつたら、復活節を迎えている意味は全くありません。

ところが、肉なる（肉体のある）我々の思いというのは、追憶の彼方にすべてを流し去ろうとする。私たち人間というものを考えてみてください。もし、イエスさまがいらつしやらなかつたら、私たちはどうでしょうか。すべて死をもつてその人生は終り、

「その人の生涯は棺かんに蓋ふたをするまではわからない」（棺かんを蓋おおいて事定まる）

とよく言います。死ぬことによつてその人の人生は完結する。そして、その死んだ人の生まれてから亡くなられるまでの生涯をずっと辿たどつて、

「この人の一生はこういうものだった」

というふうに完結的なものとして見て、そしてそれを追憶する。

「ああ、あの方のように生きたい」

という追憶の対象ではあつても、

「今、現に生きて働きたもう」

という、そういうものとしては、我々は受けとれないんです。

キリストを知らない方は愛する者と別れた時、愛する者を天に送つた時、追憶の中に生きようとしません。その人を思い出させる数々の品々や遺品を大事にします。その人が愛いとしくて、その人をいつまでも覚えて、アルバムを開き、そして時にはお墓しのに行き、その人を偲しのびます。けれども、本当に、

「いや、彼は私の中に生きている。私の胸の中にいつまでも生き続けている。別れ

てのち、いよいよ新ただ」

と告白したとしても、それは本当に根拠のあるものなのかどうか、誰もわからない。

「罪と死」という問題

それを本当に抛り所のあるものだと言つて、ドーンと後押ししてくださる方は、正に甦よみがつてくださったキリスト・イエスそのお方なんです。そのお方と我々が一つであるときに、実在する向こうの世界が私たちの中に切り込んできて、私の中に拠点をつくつて、そこで向こうの世界と今の私の現実とが一つになって生きていける。このことは主さまから目を離れたら、もうだめです。主さまの太いパイプがあつてこそ、私たちは日々新たにこの永遠の生命の中に活かされているということが実感できるんです。

もし、一年も聖書から離れて、新聞ばかり読んで暮らしてごらんさい。そうしたらもう実在する向こうの世界は遠い彼方に消えてしまいます。我々人間の生まれながらの性質というものはそういうものです。生まれながらの人間というのは、肉体を持ち、心を持ち、頭脳の働きを持ち、いろんなことができる素晴らしい存在ですけれども、それはどこまでも「閉ざされた世界」の中でしょうか生きられない。死によつて閉ざされ、限界のある人間の生まれながらの性質をキリストは「肉」と仰った。

「人新たに生まれずば、神の国を見ることあたわず。神の国を受けることあたわず」

と仰った。「人新たに生まれずば」とイエスに言われて、

「どうやって、そんなことができますか!?!」

と、ニコデモ（パリサイ派でユダヤ人の指導者。ヨハネ伝3章）は驚いた。人は「オギャ〜」と生まれて、成長して、そしてやがて枯れ木のごとく枯れて、死んで葬られて土にかえる。

「土からとられたから、そして土にかえる」

という、これが人の辿る生涯ですね、閉ざされた生涯です。始めがあれば必ず終りがある。人が「オギャ〜」と生まれてきたということは、墓場に向かつて歩んでいる。人の身体的成長は15、16歳くらいまでがピークですね、20歳くらいまでは上り坂です。けれども、やがて肉体は下り坂に向かう。そして我々の思いも、どうしてもその「死」というものの壁を破れ

ない。それから、我々のうちの「罪」という、この得体の知れないものの力に勝てない。

「罪」の問題を全く考えない方は幸せだと思っただけです。その人は肉体のことだけを考えていたらいいんだから。何が美味しいか、どこにどんな面白いものがあるか、そういうものだけを追いかけて生きている人は、

「気楽で幸せな人だな」

と、私はある意味では思います。しかし、その人が年をとつてヨボヨボになった時にどうなるんでしょうか。己のことだけを求めて生きてきた人はどうなるのでしょうか。その最後は保証の限りではありません。

「結局、つまらなかつた。すべては過去のことだ。今はつまらない。体もいうことをきかない。ヨボヨボだ。自分の愛するものはみな死んでしまった。誰も自分のことを構ってくれない。当たり前だ、私は人のことを構わないで生きてきた、自分のことだけを求めてきたんだから」

ということになりそうですね。ま、そんな極端な人はいらつしやらないでしょうけれども。我々、人間存在というものは単に生物学的な人間として、生命あるものとして生きるだけでなく、幸か不幸か、その良心というものは、善と悪というものを自分で判断する。善を欲し、悪を退けるといふものが心にしみ込んでいます。ところが、

「欲する善はこれを為さず、欲せざる悪はこれを為す」

という悩みをかかえてしまっている。聖書の中では特にローマ書などに書かれています。この「罪と死」という問題をローマ書は真つ正面から取り上げて、モーセ以来の律法を満たすことによつて罪を乗り越え、死を乗り越えて永遠の生命に生きる、ととらえてきました。律法によつて神との関係を正しくする、これが旧約聖書の道だった。それはモデルとして示されたけれども、それは到底、人間が到達することのできない描かれた理想界に過ぎなかった。そのモデルは自分たちの惨めさを証明するのみとなつてしまった。その嘆きのピークがローマ書の、特に7章なんかに書かれている。

「噫、われ悩める人なるかな。この罪の力、死の力から私を解放してくれるのは誰か？」

と言つて、ローマ書の作者パウロは叫んでいます。彼はとりわけ罪の問題に対して敏感で、「私は律法の義につきては責むべきところなし」

というふうと言つたほどの、律法を全うしようと思つて奮闘した人です。ところが、奮闘すればするほど自分はそこから遠いということ、人に冷たいということ、人を審くということ、ステパノ（キリスト教における最初の殉教者。使徒行伝7章）のような愛の心が無いということに気がついた。その分裂にパウロ（後のパウロの名でヘブライ語読みのユダヤ名）はとても苦しかつたと思うんですね。ステパノが石打ちにされる時には、ユダヤ教側に立つて、それをよしとした。ステパノが輝いて殉教していったあと、狂えるごとくに彼はキリスト教徒迫害の

急先鋒になりました。そしてあのダマスコ途上で復活のキリストに靈撃された。すなわち、白昼の光となつて現れたキリストに、

「パウロ、パウロ、なんぞ我を迫害するか！」

と、地面にぶつ倒された。三日間、目が見えずものが言えず——まるでヨナ（巨大な魚にのまれて三日三晩、腹の中で祈っていた。ヨナ書）がクジラの中にいたような——暗闇の中を三日間過ごした。そして、イエスの弟子であるアナニヤの按手を通して目が見えるようになり、新たに生まれ変わった。

「人新たに生まれずば……」

ということパウロは現実に体験させられて、それからアラビヤの野で深く祈つた。イエス・キリストが十字架に懸かつてくれた意味がわかつた。自分たちが十字架につけたキリストは、実は私たちの罪と死を全部背負つて、十字架に懸かってくださつたんだと。

隠れたる神

これは単なる出来事ではなかつた。出来事としては、ナザレのイエスという方がこういうプロセスを経て、あのような無惨な死をとげて墓に葬られた。そこまでは新聞記事に出ます。けれどもそれ以後の、復活のことは新聞記事にのりません。何の証拠もないからです。

「人がこんなことを言い伝えている」

というだけなんです。さきほど取りあげたマタイ伝でもそうでしょ。ああいうことが書かれているだけであって、誰も証明できるような形でイエス・キリストの復活の姿に出会った者はいない。

「いや、私は見た！」

と言つても、それはその人が見たのであつて、他の人は見ていない。二人の弟子がエマオ途上で見知らぬ旅人の姿をしたイエスさまに出会つて、その後夕暮になり、食事の時にその旅人のパンを裂かれる姿を見て、

「あつ、イエスさまだ！」

と思つた時に、その方はパツと姿が消えた。そして、急いでエルサレムに帰つてみたら、またイエスはそこに居られたという。これはもう新聞記事に載るような、写真で証拠を固めるような次元のことではない。だから、聖書学者の方々は、

「それは弟子の心の中に浮かんだ幻だろう、幻影だろう。あまりにも先生を慕う心がそういう幻を生み出したのだろう」

とか言う。よくありますね、遠い向こうの海の上に流水の像が映るとか（蜃気楼）、そういうようながありますよね。そういう何かが起こつたのだろうと。

「あまりにも追憶が強いために、慕う心が強いために、そういう幻の姿となつて先生が現れた。そしてすぐ消えた。そういう現象は医学的にあるらしい」

とか言つて、キリストが聖書に書かれているような姿で現れたということは科学的、学問的には証明不可能な事実だと主張する。

だから素晴らしいんです。およそ神さまの次元の世界は、科学的な証明などでは証明できるものではない。そんな安っぽいものではない。私たちはこの三次元の世界で、肉体をもつて太陽の恵みを受けて、この素晴らしい地球を生きている。そういう次元を超えた次元から、別空間から、天界という別次元から切り込んで来てくださったのが、ナザレのイエス・キリストという霊的人格なんです。それがあのクリスマス誕生から始まつて、そして三十年のご生涯を経て、最後に十字架につかれるという事で終るわけです。

その当時の人が見たのは、馬槽うまぶねの中で「オギャー」と泣いているイエスさまです。十二歳の時に何か大人の学者たちと問答しているイエスさま、伝道されてからの三年間のイエスさまのお姿、その他もろもろの姿を、肉の眼（生まれながらの人間の性質をもつ眼）で見えています。けれども、本質を見ているかどうか。そこに隠されているイエスさまの本当の姿を見ているかどうかはわからない。おそらく見ていないと思う。

だから、出来事として肉眼で確かめられるものは実際みんな見てますよね。けれどもそれは、本当のイエスさまではないんです。イエスさまの本当の姿というものはどこまでも隠されている。

「隠れたる神」

なんです、イエスさまご自身は。

イエスさまというのは、本当に私は不思議なお方だと思います。皆さん、人ごととは思わないで、自分がナザレのイエスという運命を担った人間としてこの世に現れたというふうを考えてごらん下さい。いや、そのように本当に自分の問題として受けとつてこそ、聖書と自分とは一つになる。単なる歴史的記述だったら、これはもう、興味のある人が読み、興味のない者は読まなくていい書物なんです。そうじゃなくて、今、天界という別次元の永遠界と自分とがどうつながるかという視点で読まないためなんです。聖書の記述はみなそうです。

「今、あなた自身のご自身が語られている。一対一だぞ。あなたの中に切り込んでいる。それをあなたは受けとるか？」

と、こうやって迫っている。いい加減な気持ちで読めないんです。

イエスの立場に自分を置いてみて

それで、イエスさまの立場に自分を置いてみてごらん下さい。馬槽うまぶねに寝ていたイエス。イエスさまには全然自覚はありませんね。大人たちが、

「お前は馬槽に寝ていたんだよ」

と言う。ものごとについて誰でも、

「自分というものはどんな生まれ方をしたのだろうか、自分の両親は誰だろうか？」

と、みんな気になりますよね。そうでしょ、ルーツを探ろうとする。

「お父さん、僕はどんな生まれ方をしたの？」

「うん、お前はベツレヘムで馬槽の中で生まれた。気の毒だったよ、実に」

「あ、そうなんですか……。お母さん、私はどんな生まれ方をしたの？ 私のお父

さんは本当にヨセフなの？」

「それは言えないね」

と、お母さんは黙らなければならぬ。そうでしょ。まさか、お母さんが、

「いやあ、突然、天使が現れて、こんなことがあつたんだよ」

とかいうことを、イエスに話して聞かせたのだろうか。話して聞かせたら、イエスはどんな反応を示しただろう。もし本当に話して聞かせておられたら、

「ああ、やっぱりそうだったの」

と、イエスさまが答えたかもしれない。私はそう答えられたと思う。少年イエスの不思議な姿を見えますと、もし本当にマリヤさんがそういうことを語られたとしたら、

「そうなの……。うん、それはありうることね」

とか、そう答えたと思うんです。

「そしたら、ヨセフは何なの？」

「育ての親だよ、血のつながった肉の親ではないよ」

「そうなの。それでは、僕の血のつながった親は？」

「あなたの血のつながった親はいないんだよ。あなたの本当の父は天界にいらっしやる」

「うん……」

と。どんな問答をされたか本当のところはわかりませんよ。わかりませんが、私とも少年イエスだったら、そんなことをきつといういろいろ思うと思います。誰かが、

「お前はちつともお父さんのヨセフに似てないじゃないか。本当にお前はヨセフを

お父さんと思っているの？」

とか言うでしょうね。そして、

「お母さん、人がこんなことを言っているけど、どうなの？」

とか。これは私の想像の世界ですけれども、私はイエスさまというお方は一方では徹底的に人間だと思えます。それでいながら、天から生まれたお方ですよ。かつて父と共に栄光の中にいらつしゃったお方が聖旨みむねに従って地上に降りて来られたわけですよ。そのことに、ある時気づかれる。伝道に出られてからも、絶えず気づいたと思う。そして、

「イザヤ書に書いてあること、これは私のことを言っている。あそこに書いてあることは私のことを言っている」

と、全部、自分に引き寄せて語っている。詩篇に書いてあることとか、預言者が預言したこ

ととかも全部、自分に引き寄せて、

「ああ、これは私のことを預言している」

と受けとった。そういうふうにして、自分というものが何者か——よく言われている「アイデンティティー」(identity) 他とは異なる正にそのものである、自己同一性せいどうせいです——それを絶えず神さまとの関わりの中で、しっかりと捉とらえておられたに違いないと、私は思っています。

しかし、そんなことを軽々しく人には仰らない。それなのにエマオの途上で二人の弟子たちに、見知らぬ旅人の姿をして旧約聖書からうつつと説き起こして、

「キリストは必ず苦しみを受けて、そして甦よみがえるべきではなかったのか」

と言われた。

わが受くべきバプテスマ

イエスさまは、伝道のある時から自分が十字架に懸かるということを漏らし始めました。

「これは他の人に言ってはだめだ。誰にも言ってはだめだよ」

と言いながら、選ばれた弟子には自分の奥義を語られました。ところがペテロは、

「そんなことがあってはなりません！」

と、むしろ否定してかかります。しかも聞いた時は、「ああそうか」と思っても、そのことをすぐ忘れてしまう。イエスが天に召され復活された時、女たちが墓場に行ったらイエスさ

まの遺体はなかった。

「天使たちがいて、イエスさまは復活されたと語り告げた」

帰ってそのことを他の弟子たちに伝えたら、

「たわごとと思って、信ぜざりき」

と、ルカ伝24章の所に書いていますよ。十二弟子たち——ユダを除きまして残された十一弟子たち——も、イエスが甦えられたというのを誰も信じなかったと書いてある。そのくらい、肉なる（生まれながらの人間の性質をもつ）我々の思いは、天界の霊界に属する真理というものから遠いんです。一時的に「ああわかったよ」と思っても、その理解はすぐ消えてしまう。そして、古い肉の中に（生まれながらの人間の性質に）舞い戻ってしまう。

「それではだめだよ、絶えずあなたは御国を思いなさい。キリストをいつも思っていないさい。キリストといつも一つでありなさい」

と言って、私たちの中に、そしてあなた自身の中に切り込んで来てくださるのが聖霊というお方なんです。聖霊というお方があなた方一人ひとりの中にお宿りくださって初めて、天界とあなたとが本当に太い絆で結ばれる。だから、私たちの恩師である小池先生が

「聖霊、聖霊、聖霊」

とあんなに仰った。それでは、聖霊はどうやってあなたの中に宿ってくださるか。これは神さまの聖旨だから宿ってくださいるんですけれども、聖旨だからすぐ宿れるなら、イエスさま

は十字架に懸かる必要はなかった。イエスさまが三年間、弟子たちと一緒にいて天国のことを語り、父なる神さまのことを語り、いろんな不思議な業をなさりと、これは徴だよ、徴に囚われないで、本当の奥義をつかまえるんだよ」

と、いくらお語りになっても、弟子たちはそれを信じなかった。弟子たちが本当の奥義をつかめるようになったのは、ペンテコステ（聖霊降臨）以降なんです。ペンテコステで聖霊が降った。

「この火既に燃えたらんには、われ何をか望まん。しかし、それまでに私が受けるべき血のバプテスマがある。十字架という血のバプテスマを受けなければ始まらない」

と言って、イエスは悩まれた。バプテスマ（洗礼）とはキリスト教の教会がキリスト教徒になる人を対象に行う儀礼のことです。

「思い迫ることいかばかりであるか。我には受くべきバプテスマあり」

と。マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネの四福音書が語り伝えてありますあの十字架の血のバプテスマをキリストは受けてくださった。十字架に懸かりながら、

「父よ、彼らを赦してやってください。彼らは自分が何をしているのか、知らないのです」

と語り、そして、

「わがこと終りぬ。わが霊を御手にゆだねます」

と言つて、息絶えられた。すると、

「聖所の幕がまつ二つに裂けた」

という。「聖所の幕」というのは、この世と神さまの天界、神さまとの間を隔てている幕なんです。年に一回、大祭司が動物の血を携えて、ただ一人その幕の奥に行けた。そして、自分に血を注ぎ、民に血を注ぎ、そこで贖いをやっていた。それはシンボル (symbol 象徴) に過ぎない。動物の血が我々の罪を潔めるはずがない。我々の死を生命に転換するような力を持つはずがない。けれども、シンボルとして毎年一回やっていた。ただ一回、大祭司が入つて行けるだけで、普通の人は入つて行けない。ところが、イエス・キリストが十字架に懸かり、息絶えられた瞬間に、聖所の幕が二つに裂けて、隔ての物がなくなつたという。天からこの地界への道が開けた。

「我は道なり」

と仰つたその道がここに通じたんです。

「私は道だ、真理だ、生命だ」

と仰つたその本質が復活という姿で現れた。あれはイエスさまの中に隠されていた本質が露わな姿で現れてきたんだと思います。イエスさまが十字架に懸かり、我々の罪を贖いきつた血のバプテスマがあつて、初めてイエスさまの本質が露わな姿で現れたのが復活のイエス

さまなんです。復活されたイエスさまが、イエスさまの本当のお姿です。それまでのお姿は仮のお姿で、隠されたお姿なんです。肉体をまつておられるがゆえに、弟子たちや人々には肉体のイエスさまが見えます。けれども、イエスさまの本当の本質は隠されている。

「汝らは見えども見ず、聞けども聞かず」

と、隠されていたんです。イエスさまが十字架に懸かつてくださり、我々人類の罪を贖い終えて、神の御力みちからによつて、聖霊の御力によつて、霊体という本当のお姿で現れられた。

イエスさまの肉体までも変貌したんです。私は、イエスさまのお体は墓に残つたまままで、霊体となつてイエスさまが現れてくださつても、それでもいいと思うんですけれども。もうイエスさまの肉体までが変貌して、死体が見つからないというんでしょう。肉体までも霊化されたお姿で、復活と呼んでいる本来の姿で現れた。これはかつて父と共におられた時に持つていた栄光のお姿があの時現れたんです。だから、弟子たちはそれを見て喜んだけれども、それは弟子たちの目が開かれたから見えた。喜んだけれども、それはまだ現象として見ていただけですから、本当に我々の内側に永遠のお姿として宿るにはペンテコステが必要だったわけです。

永遠の現在

今述べたように、聖書に書かれている順序でドラマが展開していきました。その展開して

いったドラマを過去のドラマにはいけない。過去のドラマなら、時間と共に消えていきます。我々の身のまわりには日々新たな出来事が起こりますが、たとえば、新聞記事に五段抜きで書かれたとしても全部過去のかたに追いやられてしまう。けれども、聖書に書かれたドラマは神さまのドラマですから、我々の中に切り込んで、

「これは永遠だ。この世のものは過ぎ去っていく。しかし、私という存在、私というものが語った言葉、これは過ぎ行くことなし」

と、そう言って我々に迫ってきてくださっている。そういうふうにはイエスさまを受けとらなければ、本当に受けとったことにならない。復活の主に出会ったことにならない。

その後、復活の主は天にのぼられた。四十日の間、弟子たちに度々現れて、みことば御言を語り、それから天にのぼられた。そして、

「エルサレムをはなれず、前に私から聞いた父の約束されたものを待ちなさい。

お前たち、祈って待ちなさい」

と命じられた。使徒たちが十日間祈っていたところ、あの火の如きバプテスマが起こりました。聖霊のバプテスマです。これを私たちには瞬間にして起こしてくださるんです。

これらの出来事は時間的順序をもつて、イエスさまがお生まれになり、地上を歩み、十字架にお懸かりになり、ご復活され、四十日間地上におられ、そして天界にのぼられて、十日後に聖霊となって降ってこられたという経過をたどります。ところが、現在の私たちにとり

ましては、永遠の霊界の現実として、つまり、イエス・キリストが十字架に懸かり、我々人類の罪を贖いきったという根源的な現実として常に新たに迫ってくるんです。過去の出来事ではなくて、現在の出来事として迫ってくる。

さらに将来、私たちは神の国を受け継ぎ、新天地が形成されます。その時の我々の姿も現在の中に迫ってくる。だから、現在というものは常に「永遠の現在」なんです。永遠の現在には聖霊がそれを我々に自覚せしめてくださる。その聖霊がどうやって私たちに宿ってくださるかという、イエスさまが十字架に懸かることによつて土台を築いた。

「十字架に懸かることによつて道を開いた。十字架は過去の出来事ではない。あなたを贖い、あなたの中に聖霊という姿で私が宿るために、私は十字架に懸かった。あなたはこれを受けとるか」

と、こう言って迫ってください。

「あなたは受けとるか。十字架は汝のためなり。私はあなたを愛した。その愛を具體的に表した。それが十字架の血のバプテスマだ。あそこであなは葬られた。あそこであなは死んでいる。もうあなは生きていない。私のよみがえ甦りと共にあなは新しく甦ったんだよ。だから、あの十字架であなは死んだ。それを今、現にあなに起こっている根源的な現実として、しっかり受けとってごらん。気づいたその瞬間に、私は聖霊という姿でもってあなの中に宿っているよ」

と。イエス・キリストが十字架に懸かり我々の罪を贖いきつたことを受けとると、即座に我々の中に聖霊が宿ります。イエスさまという存在もそうです。私たちの恩師である小池辰雄先生は、

「イエスさまは無者だ。イエスさまは神さまの前に自分を空つぽにして、投げ出している無者だ」

とよく仰った。空つぽで、神さまの前にすべてを明け渡しているその無者——小池先生はこの「無者」のことを「無即無限無量者」と言われた——無者になって数時間後に神さまが入って来られたのではない。無者の姿に徹せられたその時に、同時に神さまは充満してしまつたんです。マタイ伝で、

「幸いなるかな、霊の貧しき汝よ」

と仰っているけれど、その前にキリストご自身が霊貧しく空つぽだった。

「瞬時に聖霊という天国が私の中に宿った」

と。このことは、イエスさまがヨルダン川でバプテスマをお受けになった時に、

「水からあがられたら、霊界の天が開けて、聖霊が鳩の如く形をなしてイエスの中に宿った」

という聖書の記述からわかります。イエスさまは祈ればいつも神さまに明け渡しておられる。祈っていらつしやるということは神さまに明け渡しておられる姿ですね。

「あなたの御意を成してください。あなたの御意をお示してください」

と言って、霊の次元では常に神さまの前に自分を空つぽにして、

「父よ、汝の御意を。私は僕です」

と言って投げ出しておられた。その時に、ゼロとなったイエスさまに無限無量なる神さまが宿っておられた。全智全能なる神さまが宿っておられた。だから、片っ端から驚くような御業が展開できた。永遠の生命が宿っていたからです。イエスさまは十字架に懸かってくださるという血のバプテスマを受け、その時、同時に罪のある我々人間もバプテスマを受けることになったのです。

「われ主と共に十字架せられたり。もはや、われ生くるにあらず」

という。「水による洗礼」というものを教会に属する方々はみなお受けになりました。これはシンボル（象徴）です。何のシンボルか。イエス・キリストの死と同時に、我々もバプテスマを受けることです。それは生命に甦えらんだためなんです。キリストが復活された時、私たちもの生命も同時に甦るのです。

サタンが操ってやらせている

ローマ書6章にそのことがはつきり書かれています。

「³なんじら知らぬか、凡そキリスト・イエスに合うバプテスマを受けたる我

らは、その死に合うバプテスマを受けしを。⁴我らはバプテスマによりて彼とともに葬られ、その死に合せられたり。これキリスト父の栄光によりて死人の中より甦えらせられ給いしごとく、我らも新しき生命いのちに歩まんだためなり。」(ロマ6・3〜4)

「新しき生命」とは復活の生命、イエスさまのあの栄光の体と同質のものであります。あの姿に歩まんだためなりと。「死に合わせられる」ということはまだ前半の半分です。本当の目的は、「新しい生命に活かされる」

ということですよ。こつちが本体です。この本体が成就するためには、どうしても通らねばならない死というものがある。それは私たちが死ぬのではなくて、イエスさまが代わりに死んでくださって、

「そこであなたも死んでいるよ」

という恵みをくださることなんです。私たちがいくら自分で自分を殺しても、肉体を殺しても、それで甦ることはありません。自殺はだめです。自殺したら甦られるか、だめです。自分で自分を死に追いやつてもだめです。イエスさまだけが、

「もうあそこでああなたは死んだ。あなたは自分が辛い、自分が嫌だと言って死のうとする。気持ちはわかるが、でもあなたが死んで何になるか、陰府よみに下って何になるか。サタンに負けるな。私は十字架に懸かってサタンに勝った。あそこでああなた

も一緒に死んだよ」

と言える。この私たちが生きている現実というのは、見えないだけであって、神さまからの光や聖霊の力と、サタンという陰府の力とが闘っているんです。我々人間は、

「ああそうだよ。神さまは私たち人間を愛しておられるから、我々に力をくださっている。神さまは絶えず働きかけて、私たちを守ってくださっているよ」

ということを受けとるんです。けれども、サタンの力がどんなに今、狂おしくこの地上を惑わしているかということに思いを致さないから、判断を誤る。サタンを侮あなどるべからず。戦争を起し、クリスチャンを使って爆撃を行わしめ、それをやっている人は真剣に、「正しいことをやっている」と思っているけれども、誰も止められない。全部、サタンが操あやつってやらせている。我々がいくら「平和運動だの何々運動だの」と言っても、サタンは喜んでいるんですよ、「やらせろ、やらせろ」と。

そういう次元を突き抜けたところから聖霊の力に乗っかって、

「人々の心に聖霊を！」

と祈ること、これが本当の平和運動です。我々一人ひとりがキリストの人格に化せられていく、霊的人格に化せられていく。これしか望みはない。我々が百歳生きようと、千年生きようと、本当にキリストの聖霊の生命が宿らないこの地上は、偽りの楽園にすぎない。ヨボヨボの人間ばかりが千年生きていてどうしますか、文句ばかり言っている人間が、エゴイスト

の人間が集まってどうしますか。口では美しいことを言っても、結局はエゴイストなんです。自分ばかりが可愛い。自分によくしてくれる世の中は可愛いけれども、ちよつとでも非難されたら、もう世の中を拒絶する。それが人間性なんです。そんな人間性を讃えていたらだめなんです。口ではきれいなことを言っても、心で思うことは反対なんです。

そんなことは権威主義的な独裁者の国々の姿でわかりますでしょ。どんなに口でいいことを言っている、一部の人たちが特権を握って、金ピカの御殿に住んで、自分だけがいい思いをしている。自分たちのことを悪く言う国民は即刻処刑して、国民の100%に支持をさせている。みんな恐いからものが言えないだけだ。どんなイデオロギーであれ、結局、人間のエゴという問題を本当に解決していないイデオロギーはすべて行き着くところはそこです。それを操っているのはサタンですよ。人間は操られているだけなんです。

だから、我々はこの世の現象的な出来事を突き抜けた世界でこの世を見なければならぬ。突き抜けてくださるのが聖霊なんです。新約聖書の黙示録を読んでご覧なさい。恐ろしい世界が展開しています。

「海の三分の一は血に染まる。三分の一の人間は死ぬ」

とか、実に恐ろしいことが次々と描かれています。あれは聖霊を受けた信者だけが本当の意味がわかるように書かれています。それと質的に似たようなことが地上でますます起ころうとしている。私にはそう思える。

生物化学兵器によつてバイ菌がばらまかれたら、いったいどうなるか。例えば、琵琶湖が汚染されたら、もう我々京都も大阪もみな、琵琶湖の水で生きている者たちは生きていけない。海が汚染されたら、もうどうにもなりません。空中からサリンが散布されて空気が汚染されたら、どうにもなりません。そういうことが起こらないようにということで、一生懸命に一方では防ごうとしている。しかし、他方では、そんなことがその気になれば出来る事態が起こっているわけです。そういう物凄く人間を脅かす悪の霊力、これがサタンの仕業によるものです。これが人々を操って、恐ろしいことを起こさせている。

ですから、この地上は、その地上の出来事だけを見ていただけでは、とても判断できないと思う。私は地上のことを判断する面では無能力者であるとはつきり思っています。地上のことを判断できるほど私は賢くない。ですから、私は、いよいよキリストに祈り込み、そして自分の出来るところで、助けを求めている人に「善きサマリヤ人」となつて、一緒にキリストの生命を生きる、それをわかち与えたいと思います。

「第一のアダム」と「第二のアダム」

「42 死人の復活もまた斯くのごとし。朽つる物にて播かれ、朽ちぬものに甦え
らせられ、43 卑しき物にて播かれ、光栄あるものに甦えらせられ」（コリント前

15・42〜43）

とコリント前書15章の復活のところに書いてありますでしょ。あなた方の播くものは何か。麦を播く。種は朽ちる。ところが、朽ちないものが出てきているではないかと。

「己おのれを保たんとする者はこれを失い、わが為、福音の為に己を棄ててかかる者は永遠の生命を得る」

とキリストは仰った。そして、キリストはそのことを実践してくださいました。キリストが十字架に懸かり我々人類の罪を贖うために死んだ、その尊い死によって、本当に天と地との間に太い道が開かれた。

道というのは私たちが踏みしめて行く道なんです。旧約聖書の出エジプト記に書かれているように、イスラエルの人たちが紅海を渡って行きましたね、自分の足で踏みしめて。同じように、恐れ多くも私たちは、キリストというお方を踏みしめて行けと。「私の背中を踏んで行け」と言って、キリストは道となってくださいました。

「それを踏んで歩いているうちに、あなたもキリストの姿に化せられるよ。踏みしめて歩いて行く原動力は聖霊だ。それをあなたに与えた。あなたが十字架の意味を本当に受けとったその瞬間に、私は聖霊という姿であなたの中に宿った。マリヤさんの中に聖霊が宿って受胎が起こったように、あの十字架の死を受けとったあなたの中に、私の聖霊という生命が肉体をまとい宿った。そして新しい生命に歩んで行くんだ。これは見えないよ」

と。キリストのご復活の栄光のお姿は、キリストの本来の姿が現れたに過ぎません。だから、それに出会った弟子たちは幸せでした。いや本当なんです。マタイ伝17章に書かれているように、キリストは山上で変貌された時、あの時も眩い姿まぼゆめになられた。それもたった三人の弟子がそれを見ただけです。私たちにその見えないものを見せてくださるのが聖霊なんです。ヨハネ伝の13章から17章において主さまがこの世との別れにあたって、聖霊のことを詳しく語ってくださいます。

「真理の御霊みたまをあなた方に与える。助主たすけぬしを与える。この方がすべての真理へとあなた方を導く。今まで私が語っておいたこと、それを全部甦よみがえりらせる。そして、その本当の奥義をつかませる。これは聖霊だよ。あなたたちを決して孤児みなしごにして棄て去らない。私は行って所を備えたら、必ず帰ってくる。そして、父と私はあなたの中に一緒に宿る。我らはあなたたちの中に住処すまかを共にせん」

と。我々が新しく生まれかわることを理解するために、ローマ書6章をもう少し読んでみましょう。

「4……我らも新しき生命いのちに歩いまなためなり。5我らキリストに接つがれて、その死さの状さまにひとしくば、その復活よみがえりにも等しかるべし。

生まれながらの性質をもつ私たち「第一のアダム」が、「第二のアダム」でありたもう、十字架に懸かり我々人類の罪のために死んでくださったイエス・キリストに接つぎ木きされると、

私たちは彼と共に葬られ、そして、彼の復活の姿に化せられる。

5 我らキリストに接がれて、その死の状さまにひとしくば、その復活よみがえりにも等しかるべし。6 我らは知る、われらの旧ふるき人、キリストと共に十字架につけられたるは、罪からだの体ほろびて、

この罪の体、「第一のアダム」がほろびて、こののち罪とは無縁の新しい「第二の新生アダム」——それはキリストと同質です——の姿に化せられる。イエス・キリストと共に十字架でほろばされた私たちは、罪の力から解き放たれている。

此こののち罪に事つかえざらん為なるを。7 そは死にし者は罪より脱のがるるなり。8 我等もしキリストと共に死にしなければ、また彼とともに活いきんことを信ず。9 キリスト死人の中より甦またえりて復死に給わず、死もまた彼に主とならぬを我ら知ればなり。10 その死に給えるは罪につきて一たび死に給えるにて、その活いき給えるは神につきて活いき給えるなり。

11 斯ごとくくの汝みづからも己を罪につきては死にたるもの、

過去の私たち、旧ふるき我を「罪」というふうに表示します。その旧ふるき我はもう死んでしまった。そしてそこから解き放たれてしまった。

神につきては、キリスト・イエスに在りて活いきたる者と思うべし。」(ロマ

6・3〜11)

キリストは神の中に生き給う。そのキリストのお陰で、我々はキリストにいだかれ、そして「活いききたる者」になる。これがあなたの本質だという。我々人間は肉における限り、こんなこととは受けとれない。しかし、助たすけ主、聖霊が来てくだされば、

「誠に然り、アーメン。これが私でした。ああ、神の恵みは山よりも高く、海よりも深く広い」

ということを実感させてくださる。

新しく生まれかわることをさらに理解するために、ローマ書8章を読んでみましょう。我々は「肉と霊」という二つの姿で生きているという。生まれながらの性質をもつ「第一のアダム」の姿である「肉」なる我々は律法を全うできなかつた。すなわち、先ほども述べたように律法を満たすことで罪を乗り越えることはできなかつた。しかし、

「第二のアダム、霊なる私たちは天国に直結している。この霊なる姿の私たちでありさえすれば、あなた方は永遠の生命に生きる。旧ふるき第一のアダムに舞まい戻れば、すなわちそれは死であるぞ」

この地上の生を生きている限り、我々は二重性を持っている。「第一のアダム」に舞まい戻ること自由だし、キリストの「第二のアダム」の中に生き続けることも自由だし、それはあなたの選ぶところである。イエス・キリストを信じる我々は旧ふるきを棄すてて新あたらしきに生きる。

「誰たれでもキリストにあるならば、新あたらしくせられたる者なり。旧ふるきは過ぎ去いった。

視よ、一切は新しくなりたり」

と。絶えずキリストの中に自分を向けていかないといけない。絶えずキリストさまに向かうという努力をしなければいけない。永遠の生命そのものは努力では得られない。でも、

「永遠の生命をくださった」

という現実には生きる努力はしなければいけない。朝ごとに、旧き自分に戻るのか、キリストの新しいところへ行くのかと、私たちは決めていかなければならないですよ。

「朝食は、ミルクですか？ コーヒーですか？ それとも別の何かですか？」

と、朝ごとに決めていかなければならない（笑）。だから、ヒルティ（スイスの法学者・文筆家、敬虔なキリスト教徒）も言っています、

「朝、目覚めた時に自分がどういう思いの中に向かうか。これが決定的に大事だ。朝、目覚めた時に過去の思まわしいところへ思いがいつてしまうと、その一日はもう汚されてしまう。朝、目覚めた時に、神さまの中へスーツと入れたら、その一日は勝利だ。勝負は朝で決まるよ」

と、ヒルティは経験から言ってくれている。「聖書を読まなくては」と無理に思わなくていい。「主さま！」と叫べばいい。

「主さま、ありがとうございます。主さま、あなたによつて目覚めさせていただきました。夜ちよつと恐い夢を見たけれども、目覚めたらもうあなたの中です。もう

旧きは過ぎ去りました。大丈夫です」

と言つて、主さまにご挨拶しないといかん。我々は日常生活で人さまには挨拶しますね、「おはようございます」と。もつと大事なことは先ずイエスさまにご挨拶することです。

「ありがとうございます、目覚めました。外は雨ですけれども、あなたにあつたら晴です。ハレルヤー！」

と言つて（笑）。晴れてたら、ますます「ハレルヤー！」とか言つてね、そうやってイエスさまにご挨拶して、イエスさまの中に生きていく。

「そうだよ、そうだよ。今日も一緒に行くんだ。力を与えるよ」

「私は無力です。あなたの御力で歩ましめてください。私は大それたことは望みません。私のすべきこと、『お前の今日やることはこれだよ』と仰つたことに私は全力投球いたします。どうぞ、それをやらせてください」

と言つて、ことごとくに主さまの導きのもとに歩んでいく人生。それが新しく生まれた私たちの人生なんです。

もしイエスがエゴイストだったら

旧き私たちは自分で計画し、自分の思いに従つて行動し、そして「成功した」と言つては喜び、「失敗した」と言つては嘆く、これが旧き私たちの歩みでした。「病気になるつた」と言つ

ては心配し、「治った」と言つては喜ぶ、そういう私たち。それが私たちの「第一のアダム」としての営みなんです。多くの人はその営みの中に終始している。けれども、
 「そういう営みの中に閉じこもっていては、あなたに永遠の生命はないよ」と言つて、天国から、神さまの世界から急降下してきて、道を開いて、

「ここに生きるんだよ!」

と言つて示してくださったのがイエスさまです。その他にどなたがこんな道を開いてくださったか。具体的にですよ、「具体」の意味は体を具えての意味です。我々と同じ姿で、我々と同じ人生を歩みながら、しかし、それを乗り越えた次元を絶えず徴を通して示してくれた。病死したラザロを甦らせたこと(ヨハネ伝11章)、あんなことは普通の人間にはできっこありませんでしょ。死んで間もない人間ならまだ、霊が戻ってくれば生き返りますよ。ラザロのように四日経つて肉体が朽ち果てようとしているものを元の姿に戻す。そんなことは出来ることではありません。しかし、あのラザロの甦りだって、結局考えてみたら、元の姿に返っているだけで、永遠の生命ではないですよ。そうでしょ。ラザロの元の姿であつて、第一のアダムの姿にまだ留まつている。あの出来事はシンボルなんです。

「キリスト・イエスにある者は永遠に死なず。我を信ずる者は死すとも生きん。およそ生きて我を信ずる者は永遠に死なず。汝、これを信ずるか」と迫られた。これは、

「あのラザロの甦り以上の世界を与えるぞ」

という、そのいわば徴としてラザロを甦らされた。

「永遠の生命というものは、もつと凄い、とんでもない、驚くようなことだ。驚くようなことしか神さまはなさらないよ」

と。そういう神さまの驚きの世界、喜びの世界、生命溢れる世界。こうした世界を人間は憧れながら、実は諦めていたんです。ところが、本当に弟子たちの目の前に示された。すると弟子たちは、

「たわごとと思つて信ぜず」

と。こういう反応でしょ。それで、パウロは言います、

「イエスが甦られなかったら、我々も甦ることができない。イエスさまがあのような姿で現れられたということは決定的に大事だ。あれが起こっているから、我々も同じ姿に化せられるんだ」

とコリント前書に書かれている。もし、イエスさまがエゴイストでね、

「私は天の父と一緒にいたい。もうこんな人間どもは放つておいて。しばしば地上に現れて福音のことをしゃべつたけれども、あいつらは私の言うことを全然聴きません。あんなやつらはもう棄てます。お父さん、私はあなたのところへ帰りたい」

と言つて、スーッと天に飛んで行つたら、それで終りだったんです。ところが、イエスは

「本当に十字架を受けなければならぬですか？」
と、十字架に懸かる前夜にゲッセマネの園で必死に祈った。

「なぜイエスは十字架に懸からねばならなかったのか。どうして十字架に懸かることをイエスは受けたのか。そして我々人類の一切の罪を贖いきることを終えて、霊体として栄光の姿で現れた。そして天に昇られて、聖霊を降し、イエスは働いておられる。私たちを通して働いてくださっている」

という。そうしたイエス・キリストのことを小池先生が作詞された召団讃歌A5番。「わがみ神よ」は素晴らしい讃美歌です。これは聖書の大奥義をつかまえた讃美歌ですよ。

〔註：A5「わがみ神よ」(讃美歌320「主よみもとに」の曲で)

- 1 わがみ神よ十字架の この苦杯を取り去り み許にゆき父と共に とこしなえに在りたし。
- 2 されど我はみ父の み旨により十字架を 負いて往かんゴルゴダへと 我を棄てて従わん。
- 3 主の十字架のかたえに 悪しき者ら懸けらる 驕る心砕ける胸 これぞ人類の分かれ目。
- 4 主言い給う砕けの 胸の者に「汝は 我と共に今日この時 パラダイスに在るべし！」。
- 5 午後の三時天地は 雷鳴のため晦冥 いなずま飛び地震振えり 歴史を絶つ徴候ぞ。
- 6 十字架の主は叫べり エリエリレマサバクタニ 更につづく大音響 聖所の幕は裂けたり。
- 7 主は十字架を荷いて あがないわざ果たして 甦りて現れたり マグダレナに最先に。
- 8 復活の主は昇りて 神の右に坐したり み約束のみ霊降だす 時を待ちて祈り給う。

- 9 聖霊は火か疾風か 祈る群に臨めり ペンテコステのバプテスマぞ！ エクレシヤは成りたり。

それから、召団讃歌A6番「神を無みして」では、

「人間どもよ、本当に目覚めろ。本当に根源に帰らなければ何をしても結局それは無駄に終る。根源のところへ帰れ。神を無みしていたらだめだ。そこへ帰れ」

ということを歌っている。

〔註：A6「神を無みして」(讃美歌260B「千歳の岩」曲で)

- 1 神を無みして万ずの事を いか謀るも空の空なり ああ亡びゆく文明文化。
- 2 剣を執れば剣に亡ぶ 万ずの国は自滅への道 ああ人の世の罪ぞ果てなき。
- 3 世紀の終末近づきたれば 心を裂きて神に帰れよ！ 三次大戦いつかは知れず。
- 4 大和島根の人よ醒めよ 古来われらは道の民なり 今こそ受けよキリストの道。
- 5 預現者どもも主の使徒たちも 亡びゆく世に真理の道の 証を立てて世を去りゆけり。
- 6 幼児どもに国境なし イデオロギーの限界を悟り 人間に帰って手を握り合え。
- 7 人はずと霊止神仏なり 万象帰一物心一如 万ずの人よ相抱けよや。
- 8 歴史の終末明日に迫るも 主にこそ在りて人をば愛し 今日一日を千年と生きん。

イエス・キリストを信じる私たちは、クリスマスであろうと、復活節であろうと、ペンテコステであろうと、いつもイエス・キリストというお方を中心に祈ります。イエス・キリス

トは父の御意を體現して、我々の前に現れてくださり、そして、我々どうしようもない人間どもを愛して、十字架に懸かってくれました。そしてご復活されて栄光の姿で現れて、「その栄光の姿にお前たちを化すまでは終らないぞ」

と言って、今も祈り続け、我々のうちに宿り続け、働いてくださる。素晴らしいお方ですよ。

死によって閉ざされている世界

ルカ伝24章の所を見ます。

「1一週ひとまわりの初はじめの日、朝まだき、女たち備えたる香料を携えて墓にゆく。2然るに石の既に墓より転まろし除のけあるを見、3内に入りたるに、主イエスの屍しかばね体を見ず、4これが為ために狼狽うろたえおりに、視よ、輝ける衣きを着たる二人の人その傍かたわらに立てり。5女たち懼おそれて面おもてを地に伏せれば、その二人の者ひという『なんぞ死にし者どもの中に生ける者を尋ぬるか。6彼は此こ処こゝに在いまさず、甦よみがえり給えり。』」

(ルカ24・1〜6)

ひとつ前の章、23章の終りのほうでアリマタヤのヨセフが、議員で身分が高かったので、ローマの総督ピラトに願い出て、イエスの屍しかばねを十字架からおろして葬ったということが書かれています。

「51……ユダヤの町なるアリマタヤの者にて、神の国を待ちのぞめり。52此の人

ピラトの許もとにゆき、イエスの屍しかばね体を乞い、53これを取りおろし、亜麻布にて包み、いわおに鑿ほりたる未だ人を葬りし事なき墓に納めたり。54この日は準備日なり、かつ安息日近づきぬ。55ガリラヤよりイエスと共に来りし女たち後に従い、その墓と屍しかばね体の納められたる様とを見、56帰りて香料と香油とを備う。かくて誠命まことに遵したがいて、安息日を休みたり。

1一週ひとまわりの初はじめの日、朝まだき、女たち備えたる香料を携えて墓にゆく。」(ルカ23・51〜24・1)

ここまでの記述は、いうならば「肉」の次元というか、我々の住んでいるこの世の次元の振る舞いなんです。アリマタヤのヨセフや女性たちが誠心誠意、イエスさまに尽くしている姿です。安息日だから香料を塗ることができないので、安息日が終ったら、一番にお墓に行つて遺体に油を塗つて慰めて差し上げようと思つている。どこまでも慕わしいイエス・キリスト、我々と一緒に歩んでくださったイエス・キリスト、人間としてのイエス・キリスト、先生としてのイエス・キリスト、しかし無惨にも十字架に懸けられて殺され、その遺体を私たちがあずかって墓に葬った。これに香油を塗つて、出来る限りのことをして差し上げよう、花も備えようと、そういう閉ざされた思いの中に生きている。誠心誠意に。それが行つてみたら、墓は空っぽだった。

「どうしたことか、これは!?!」

ということ、女たちはうろたえたと書かれています。うろたえていたら、輝ける衣を着た二人の人が傍らに立っている。ますます恐れた。これは何ごとかと。そして、二人の者が、「なんぞ死にし者どもの中に生ける者を尋ぬるか」

と。非常に象徴的な言葉です。「死にし者どもの中に生ける者を尋ぬるか」と。私たちの生きていますこの地上の世界は、「死にし者ども」の世界なんです。結局は、死というものによって閉ざされている世界です。さつきから言いました、追憶の中に生きる世界なんです。命日ごとにお墓に行つて、その人を追憶し、花を捧げる。もう屍しかばねも何もありませんけれども、追憶の中に生き、そして、「私たち生き残つた人間は立派に生きますから」と言つて誓いをたてる。やがて私たちも死んでいくという、閉ざされた世界なんです。ところが、天使は

「どうして、その中にあるあなたは留まるの？ イエスさまはその中にいらつしやらないよ。別次元の生命の世界に生きておられる。その次元をこそイエスさまはあなた方にもたらしめたのではないの？ どうして目が覚めないの？ 目を覚ましなさい！ いつまでも第一のアダムの世界に留まっていたはだめ。第二のアダム、永遠の生命、霊体をもつて現れてくださったその世界こそが、神さまがあなた方一人ひとりに与えようとなさっている本ものの世界だ。あなた方は本ものに出会いなさい。この地上は、本ものに出会うための第一のステージにすぎない。第二のステージに進みなさい！」

と言つてくれているんです。

「朽つるもので播かれ、朽ちないものに甦よみがえる」

という。生まれながらの性質をもつ「第一のアダム」は死をもたらしした。霊なる「第二のアダム」は生命をもたらしした。これが神さまの御意みこころだと。キリストは、

「我は道なり、真理まことなり、生命いのちなり」

と言われた。イエスさまの本質の一つが「我は道なり、真理なり、生命なり」という言葉で表されている。

「私は本当の道、神さまの道であり、人が生きる道であり、私たちが踏みしめて歩くその人生そのものである。そして、本ものだよ」

という。「本もの」というのは、見えるところの奥に隠された永遠なるものである。

「本ものは朽ちゆかないものだ、人を活かす愛だよ。そして私は永遠の生命だ」

と。イエスさまと同じ姿に変貌する。そのためにイエス・キリストは十字架に懸かつてくださり、聖霊として我々の中に内住されたのです。こうしたとはすべて聖霊が我々に理解させてくれる。

新しい天命に生きる

ローマ書8章をもう一度見てみましょう。

「この聖霊は我々の死すべき体からだを活かし給う」

と書いてある。

「我々は所詮、死ぬべき体だ。しかし、その死すべき体をなお活かし給う、なお甦らせ給う」

と、そういうことが書かれています。聖霊の主さま、このお方が我々一人ひとりの中にご内住くださる。そのことは私たちの側には何の抛り所もない。

「善人だから、これだけ努力したから」

とか、我々の側には何の抛り所もない。一方的な主さまのご愛です。それによって万人が救われる。このことがまた受けとりにくい。理性的に考えたら、イスラエルでイエス・キリストが十字架に懸かってくださったことが、なぜ今の私にそんなに深い関わりがあるのか。

「昔あったことがどうして今、私たちに関わりがあるのか。あれはイスラエルで昔起こったただの過去の出来事なんですよ。それがどうして今の私たちに関わりがあるのか。仮に関わりがあるとしても、何十億という人間がいて、なぜこの私に関わりがあるのですか？」

というふうに思いますよね。そういう思いに対して私は申し上げたい。

「太陽をご覧なさい。太陽の光は、何十億年の昔から地球を照らし続けている。地球には何十億の人がいる。昔の人も今の人もみんな太陽の光を一身に受けてきた。

今もそうだよ。戸外に出てごらん。雲間から太陽の光が射してきたら、暖まりを感じてしまよ。あの太陽が地球上の何十億という、過去から現代までの人たちを照らし、生命いのちづけてきたんだよ。肉体の生命ですら、たった一つの、まるで永遠の實在者の如き太陽という存在によって生きてきたのではないか。それと同じように、霊界の太陽であり給うキリスト・イエスさまは我々一人ひとりを照らし、活かさないはずがあるうか」

と。自然界の太陽は、霊界のキリストのシンボルとして、キリストを指し示す誠に素晴らしいシンボルとして、今も永遠に照り続けてくれている。

「その暖まりを蒙こうむらざるものなし」

と、詩篇にあります。復活のキリスト、霊界のキリスト、永遠界のキリストが今、聖霊という姿で一人ひとりの中に宿り給う。「私なんか宿るのか？」と言う前に、

「あなたは私と一緒に十字架につけられた。もう私が懸かった十字架で運命共同体になってしまった。あなたは気づかなかったかもしれないけれども、あなたの生まれる前から私はそうしたんだ。あなたの生命は私が懸かった十字架にあったんだよ、実は。あなたの知らない時に、私が懸かった十字架であなたを愛して、あなたを贖った。よくぞ今、気がついてくれたね。さあ今、あなたの中に宿ったよ。これであなたと本当になれた。さあこれから一緒に生きるんだよ」

と。そういうキリスト族、キリストの子供、神の子、これをつくる働きをずっとキリストはしておられる。そして、神の子になったら、我々全員を天界へ招いてくださる。我々がこの地上で働きを終わった時は、御許に呼んでくださる。

「地上にある間は御意に従って働きなさい。私も御意に従って働いた。あなたも地上にある限りは、私の弟子として働きなさい。霊なる第二のアダムとして働くんだよ。もうかつての第一のアダムではないよ」

これが私たちに与えられた新しい使命、天命なんです。50歳で気づかれた方も、20歳で気づいた方も、80歳で気づく方も、等しくその使命に生きる。マタイ伝20章に、

「朝の5時から働いた人、夕方5時にやっと働きにありついた人、みんなに等しく1デナリを与えた」

というお話がありますね。同じように、神さまの御意を地上にいる間に早く気づこうが、遅く気づこうが、神さまは差別されない。気づいた瞬間に、

「あなたは生き返ったよ、あなたは甦った。あなたは放蕩息子だったけれども、死んでいた生命、失われた生命が甦ったんだよ」

と言って、放蕩息子を抱きしめる親父のように、イエスさまは永遠に、いついかなる瞬間にも我々人間に働きかけてくださる。

「甦ってほしい。本当の生命に、第二のアダムの生命に生きてほしい」

と言って、イエスさまは迫っておられる。これをしっかりと受けとるのが復活節の意義なんです。本日この時間に、皆さん、しっかりと受けとってくださいたと私は信じたい。けれども、「いやあ、私はまだだめです」

なんて言う方がおられるかもしれません。何でだめですか。イエスさまが十字架に懸かり、我々の罪を贖いきったことが先に行われています。この事実が単なる事実ではなく、神さまの愛の行為、神さまの愛の御業なんです。ヨハネ伝には、

「初めに言ありき」

と書かれています、むしろ、

「初めに行ありき」

です。十字架に懸かり、我々の罪を贖いきったという愛の御業が成就した。そしてご復活ということが成就した。それでイエスさまは皆さんの中に入ろうとしておられる。我々は、「はいっ、ありがとうございます！」

と。「はい」と言うこと、それだけです。ヨハネ伝の始めのほうにありましたね、

「『はい』と言う者には神の子となる権を与え給えり。人の血筋によらず、肉の願いによらず、ただ神においてのみ生まれたり」(ヨハネ1・12〜13)

と。ヨハネ伝であろうが、コリント書であろうが、他の福音書であろうが、ローマ書であろうが、全部つながっています。それで聖書はいろんな角度から切り込んできてくれている。

「神はその独子ひとりごを賜ったほどにこの世を愛してくださいました。信ずる者の亡びずして、永遠とこしえの生命いのちを得んがためなり」(ヨハネ3・16)

と。「永遠の生命」とは何ですか。さつきから申して、復活のキリストのあの栄光の姿に宿っている生命です。これを一人ひとりに与えんとしてイエスは来てくださった。そういうことで、皆さんの中にこの復活の主さまが聖霊となつて宿ってくださいました。イエスさまが我々の罪を贖うために懸かってくださいました十字架、そのあとのご復活、そうした事態を深く深く開示してくださいましたことを私は信じたいと思います。それでは、終りいたします。

祈り

主イエス・キリストさま、十字架に懸かり、陰府よみに下り、墓を蹴破つて甦り給うた、栄光の本然の姿を現わし給うた、愛の主イエス・キリストさま。ありがとうございます。あなたは私たちをあなたの永遠の生命に化せしめんとて、我々の知らざる所にて、あなたはお生まれになり、生きてくださり、十字架を負ってください、そして甦ってください、聖霊となつて弟子たちにくんだり、今、私たちの中に受肉してくださったことを感謝いたします。

我々は日々に十字架で葬られ、日々あなたと共に甦つております。主さま、旧き我を葬り去つて、

「誰でもキリストにあるならば、新しく造られたものなり。旧きは過ぎ去つた。

視よ、一切は新しくなりたり」

と、そのようにして私たちは日ごとに新しくあなたと共に歩んで参ります。

あなたの一方的な無条件のご愛を感謝いたします。等しく誰にも等しく、

「わが意こころなり」

と言つて、あなたが聖霊をくださることを感謝いたします。

十字架で我々は碎かれ、あの碎かれたるあの罪びとの姿となつて、

「汝、今日、我と共に、パラダイス！」

と言われる、主さまと一緒にパラダイスをいただいで、聖名を讃えつつ歩んで参ります。あなたがとうございます。天界の小池先生、また、既に召されました兄弟姉妹たちと共に、また天の万軍と共に、あなたの御愛を深く感謝し、聖名を讃え奉りますたてまつ。

今日ここに集われた一人ひとり、掛け替えのない一人ひとりでございます。主さま、どうぞ、あなたの奥義を示し、限りなくあなたの愛する子として、また僕として、聖名を持ち運ぶ器としてお用いください。

主イエス・キリストの聖名みなにあつて、この祈りを御前みまえにお捧げいたします。アーメン。